

## 第 8 回筑波大学応用言語学研究会 発表要旨

<講演要旨>

### ポライトネス研究から見たモダリティ

牧原 功 (群馬大学)

本発表の目的は、蓋然性判断のムード形式及びそれに準ずる「だろう」「と思う」等の断定を避ける文末の諸形式がポライトネスにどのように関わっているかを概観し、ムード形式の意味を問い直すことにある。例えば以下の例において、なぜ「でしょう」という形式が不適切な用法になるのかについて、これまでのモダリティ研究は考察の対象とはしてこなかった。

S1 (学生 1 : 司会者) : これはどうしてだと思いませんか？

S2 (学生 2) : ~だからなんじゃないでしょうか。

S1 : S3 (学生 3) : さん、今の S2 さんの意見についてどう思いませんか？

S3 : \*正しいでしょう。

先行研究では、「だろう」が推量を表すには内容として取り上げられることが話し手にとって未知のことでなければならないとされているが、(1)では司会者が確実な情報を持っているとは限らずこの条件には抵触していない。

本発表では、例えば独話における《主張》という発話機能の文において配慮表現として使用することができる文末の諸形式すべてが、他の発話機能の文中でも配慮表現として使用することができるわけではないことを指摘し、ある文末形式がどのような発話機能の文で使用できるか、それは何故かを意味論的、語用論的に考察する。

本発表で主張する主要な新たな知見は、①「だろう」は聴者の消極的フェイスを脅かすFTA となる可能性があり使用環境に制約がある、②「と思う」は意味論的に独特の性質を持ち汎用性を獲得している、③配慮表現としてある文末形式が使用可能か否かは意味論的な制約による場合と語用論的な制約による場合がある、という点である。そして、これらの考察を通じてムード形式の本質的な意味が更に明確化される可能性があることを示す。

<分科会第1会場発表要旨>

## 日本語数量詞 N ノ QC 型について

### —照応用法との関係から—

田中 佑 (筑波大学大学院)

日本語の数量詞には以下の四つの構文があるとされる (Q ; 数量詞、N ; 名詞、C ; 格助詞、ノ ; 連体助詞)。

- (1) a. 3人ノ学生ガ反对シタ。(Q ノ NC)
- b. 出席シタ学生ノ 3人ガ反对シタ。(N ノ QC)
- c. 学生ガ 3人反对シタ。(NCQ)
- d. 学生 3人ガ反对シタ。(NQC) (矢沢 1988)

本発表では、Q がもっとも名詞的に用いられていると思われる (1 b) を、数量詞が文中に単独で現れる「照応用法」との関係から議論する。

具体的には、N ノ QC の N を固有名詞の場合と普通名詞の場合に分け、前者をコピュラ文の一種である定義文との関係から、後者を非限定的連体修飾との関係から論じる。また、N ノ QC は部分数量を表すことが指摘されているが、それが前文脈もしくは語用論に依存することも併せて指摘する。

《主要参考文献》

矢沢真人 (1998) 「数量の表現」金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典』pp.209-211  
大修館書店

## 日韓における「二重ヲ格(reul)構文」の再検討

### —数量詞構文における認可条件—

安 祥希 (筑波大学大学院)

日本語と韓国語はともに「二重ヲ(reul)格構文」が見られる。しかし、両言語の捉え方には相違があるようである。日本語は、「二重ヲ格制約」が働き、文中でヲ格が二つ以上現れることを嫌う傾向にあるが、韓国語は「二重 reul」に対する許容が緩い。特に、韓国語の NP1 における「ruel」については、従来、主題化、主題マーカーなど格の意味役割についての議論が多々見られる。しかし、どのような役割を持つのか的確な答えは未だ見つかっていないようである。本稿は、日本語と韓国語でヲ格が二つ現れる「二重ヲ格(reul)構文」を研究対象とし、再検討を行うものである。課題は3つに絞られる。第一に、「二重ヲ格(reul)構文」の再検討を通じ、日韓の相違点を改めて整理する。第二に、NP1 と NP2 の関係性から格の働きについて述べる。最後に、数量詞構文に現れる「二重ヲ格(reul)構文」の認可条件や日韓の相違などについて考察する。

## 根拠を表す「～のことだ（から）」におけるコトの分析

湯本 かほり（筑波大学大学院）

本発表では、次のような例を対象とする。

- (1) 戦争中のことだから、何が起こるかわからない。
- (2) 健のことだ。怒ってカッとなったら、何をするかわからない。

（用例は『日本語表現文型辞典』より）

「～のことだ（から）」は話し手の判断の根拠を述べる際に用いられる。後続の文には、断定・推量の表現が続く。上記の例においては、コトを除くと以下のように許容度に差が生じる。

- (1)' 戦争中だから、何が起こるかわからない。
- (2)' \*健だ。怒ってカッとなったら何をするかわからない。

一方で、コーパス上では先行名詞において時名詞・有生名詞の例は多くみられるが、無生名詞の例は少ない。これは、目的語位置に現れる介在可能なコトの特徴とも共通する。

- (3) ?祭りのことだから、きっとにぎやかになるだろう。（作例）

本発表では、「～のことだ（から）」型の根拠を表す文が成立する条件を整理したうえで、この文型におけるコトの意味をコトの周辺的な現象と関連させながら分析すること目的とする。

## 非恩恵を表すとされる「テヤル」の意味分析

部田 和美（筑波大学大学院）

授受補助動詞テヤルには、典型的な恩恵表示の他に非恩恵的な意味が広く認められている。非恩恵的なテヤルとは以下のようなものである。

- ・今度こそ試験に合格してやる。
- ・彼の秘密をみんなにばらしてやった。

先行研究(豊田(1974)、山田(2004)等)では、これらを「意志・強意」また「マイナス利益」などと呼び、恩恵表示のテヤルとは別の意味を与えている。本発表では、上記例のような非恩恵的テヤルも、恩恵的テヤルと区別されるものではなく、その意味特性によって統一的に説明できることを示す。

具体的には、テヤルの素性の一つである〈働きかけ〉が持つ「意志性」「直接性」といった性質が意味決定に大きく関与していることを示し、テヤルに見られる多様な現象が、個別に意味を付与しなくとも、「(動作主の)行為の意図性」、つまり「動作主の好意的な働きかけなのか、悪意の働きかけなのか」で説明可能であることを証明する。

<分科会第2会場発表要旨>

**女性標示語「婦人」について**  
**—65年間の新聞で見るその推移—**

徐 徽潔（筑波大学大学院）

本発表は、朝日新聞のデータベースを利用して、1945年度から2009年度にかけて65年間の記事を検索、女性標示語「婦人」のつくことばをサンプリングし、「婦人」の推移、使用される複合語の様相などを分析、考察したものである。考察の結果は、次の通りである。

- 1) 戦後から昭和末期にかけては、「婦人」は多少の増減を繰り返したが、徐々に増加している。
- 2) 平成元年から2009年までは、平成元年はピークを迎えたが、それ以降は次第に減少していき、「婦人」を「女性」に置き換える傾向が広まっていく。
- 3) 「婦人」に関するイメージの変化（プラスからマイナスへと）などの関係で、今後も、「婦人」が減りつつあると考えられる。
- 4) 「婦人」はカタカナ語とも結合するが、漢語と結合するのが普通である。

本発表では、「婦人」の歴史的変遷を中心に見てきたが、その変遷を引き起こす要因や「婦人」に関する意識調査などは今後の課題としたい。

**北方領土における日本語教育**

**—相互理解の観点から— （仮）**

入山 美保（筑波大学大学院）

本題目、要旨は後日掲載予定

## ブラジルの理科教科書と日本の理科教科書の談話構造の比較

山元 一晃（筑波大学大学院）

日本の小学校・中学校・高等学校等における日本語指導が必要な児童生徒は、ポルトガル語を母語とする者が最も多く、その数は1万人を超える(文部科学省 2009)。

本発表では、日本で用いられている理科教科書とブラジルで用いられている理科教科書の談話構造や表現に着目し分析する。

まず、日本語の教科書、ブラジルの教科書の各課を取り上げ、その構成を紹介する。その上で、各教科書で用いられている言語的な表現の差異を中心に分析していく。日本の教科書は、観察・実験の例を示し、その結果から考察させ、ある項目を導入していく構造をもつが、ブラジルの教科書は、質問をまず提示し、それに答える形で導入していく。そのため、日本の教科書では、実験や観察の手順やその結果に割かれる部分が多く、ブラジルの教科書では質問の解答に割かれる部分が多い。本発表では、この構造の違いが、両国の教科書の言語表現にも差異をもたらしている可能性を述べる。

### 反省会における評価とその応答

#### —専門家が同席する反省会における知識の交渉—

杜 長俊（筑波大学大学院）

特定のものや人物を評価(assessment)する発話が産出された際に、その発話を宛てられた話者は、評価に対する応答を産出することが期待される。隣接ペアのように、質問が回答を要請するほど強いものではないが、評価をする発話に対して、その評価に同意・不同意をする応答が期待される(Pomerantz 1984)。Heritage&Raymond(2005)は、評価とその応答(評価に対する同意という応答)において、知識の権威(epistemic authority)がどのように交渉・調節されるのかを記述し、その評価の対象について誰がより知っているのか、誰がより知識を持っているのかを交渉・調節する様々なリソースを明らかにした。そのことから、評価とその応答の中で、知識の交渉がしばしば関わっていることが分かる。本稿では、専門家が同席する反省会という活動で、評価とその応答において、単に知っているかどうかということだけではなく、「専門家」としての知識と、自分が担当した授業に関する「本人」としての知識などがどのように交渉されるかを明らかにするとともに、それがどのように活動の目的に関わっているのかを考察する。